

ヒトを対象とした調査・研究に磨きをかけるコツ教えます 第3回

学会抄録の書き方: その1 「タイトル」と「はじめに」

佐々木 敏

独立行政法人国立健康・栄養研究所 栄養所要量策定企画・運営担当リーダー

1. はじめに

学会などでは発表に先立って抄録を提出し、抄録集（講演集と呼ぶこともあります）が作られます。学会によって異なりますが、抄録の長さは日本語の場合、800文字程度、多くても2,000文字程度です。その中に伝えたいことをもれなく書き込まなくてはなりません。そこで、学会抄録の書き方のコツについて、実際の抄録原稿を例にあげて解説を試みることにします。今回は、抄録の看板である「タイトル(演題)」と、導入部分である「はじめに(序論)」について考えます。

2. 具体的な「タイトル」は魅力的である

大きな学会になりますと、数百もの発表が並ぶこともあり、どれを聞きに行けばよいのか迷ってしまいます。発表数が数十の小規模な学会であっても、「まず、タイトル(演題)を見て、興味を引かれたものの抄録を読む」のが普通でしょう。それを考えると、できるだけ魅力的なタイトルにしたいところです。しかし、実際の研究内容と違っては困りますし、研究内容を誤解されても困ります。では、ここで3つの抄録のタイトルをみて、どのような研究なのか、想像してみてください。

抄録①～③「タイトル(演題)」

- ① 組織的な事故防止対策としてのスタッフミーティングの効果
- ② 加圧部皮膚温と褥瘡治癒経過との関連
- ③ 指導者と学生の人間関係から見た実習環境

①の場合、「スタッフミーティングをしたら組織的に事故が防止できたのかな？」と想像するかもしれません。②では、「加圧部皮膚温と褥瘡治癒経過とのあいだに何か関連(相関など)があったのかな？」という想像が妥当なところではないでしょうか。③は、「指導者と学生のあいだの人間関係の良し悪しが、実習

の環境に何らかの影響を与えていることを観察した」のでしょうか。しかし、人間関係を実習環境の構成要素のひとつと解釈しますと、この推測は成り立ちません。「人間関係が悪いと実習成果に良くない影響を及ぼすことを観察したのかな？」とも考えられますが、「実習環境」であって、「実習成果」ではないことから、この推測はおそらく誤っているでしょう。

このような推測が当たっているか否かは、「はじめに」、「方法」と読み進むうちに明らかになってくることでしょう。

3. 背景から目的までのストーリーが「はじめに」である

抄録②の「はじめに(序論)」を最初に読んでみることにします。内容を整理しやすいように、文章を(A)から(D)に分けました。なお、接続詞、専門用語の説明に関する文章、倫理規定に関連する文章は省略してあります。

抄録②「はじめに(序論)」

- (A) 当救急センターに搬送される患者には、(途中省略)搬送時すでに骨突起部に発赤から紫色の褥瘡を生じている場合を認める。
- (B) 深度分類において浅い褥瘡と判断し、湿潤環境下で閉鎖状態にするとドレッシングを交換したときには壊死状態に陥っていることがある。
- (C) 先行研究の動物実験では、治癒が遅延する褥瘡と治癒する褥瘡において(中略)、加圧部の皮膚温と正常な皮膚の皮膚温との温度差が立証されている。
- (D) 発赤を生じている患者の皮膚表面温度を測定することにより褥瘡の治癒経過を予測できると考え、各皮膚温を測定し温度を比較した。

(A)から(C)で背景を紹介し、(D)で実施した研究について説明しています。これは典型的な「はじめに」

の書き方です。まず、(A)で自分たちの経験を紹介します。医療のような応用科学では、研究を始めるきっかけの多くは、現場で生じた疑問や、対処・対応に困った事例でしょう。それを簡単に紹介する文章は、効果的な導入となります。この例では、(B)でも例の紹介が続いています。そして、(C)で先行研究を紹介しています。先行研究の紹介は重要で、不可欠といっても良いくらいです。なぜなら、「答えがないから研究を行う」からです。さらに大切なことは、「先行研究で明らかになっていない疑問は何か」です。そして、「明らかになっていない疑問を解くために、今回の研究を行った」というストーリーになるわけです。この例では、「ヒト(患者さん)では明らかにされていない」というのが、解かれていない疑問であり、今回の研究で解くべき疑問になります。したがって、「…立証されている。しかし、ヒトにおける報告はない。」とすれば、(C)は完璧でしょう。これを理解した上で(D)を読むと、(D)の目的や実際に行った研究内容を容易かつ適切に理解することができます。研究の背景から目的まで順を追って理解することができ、うまく構成された、「はじめに」の例といえるでしょう。

次に、抄録①を読んでみましょう。

抄録①「はじめに(序論)」

- (A) 当看護部ではインシデント・アクシデントは、SHELLモデル分析を導入し、ヒューマンエラーの視点から当事者自身を分析した再発防止対策を実践している。
- (B) 各看護単位のリスクマネージャーは報告した事例をさらに医療チームで共有することが効率のよい対策に結びつくと判断した場合、リスクマネージャー・スタッフミーティング(以後、スタッフミーティングとする)を開催し対策を検討している。しかし、それぞれの対策についての質的な分析や評価をしていなかった。
- (C) SHELL分析書とスタッフミーティング報告書の対策を組織的な視点から比較した。
- (D) スタッフミーティングは川村が述べている医療従事者間とのコミュニケーションの改善をはじめ、組織で可能なシステム改善に結びついていることの示唆を得たので報告する。

この例でも、導入部である(A)と(B)で、自分たちが行っていることを紹介しています。ところが、先行研究の紹介や、現時点で明らかになっていない疑問、さらには、明らかにしたいと考えた疑問に関する記述

がないままに、この研究で行った内容が(C)で説明されています。実は、(B)の後半部分の「それぞれの対策についての質的な分析や評価をしていなかった。」が(C)の前提になると考えられますが、自分たちがそのような評価をしていないだけであり、他の医療機関ではすでにそのようなことがなされており、そのような評価にどのような意味があるのか(または、ないのか)がすでに明らかにされているとすれば、いままさら研究にはなりませんし、学会で報告する価値もありません。そこで、(D)を(C)の前に持ってきて、次のようにすると順序が整うのではないかと考えられます。

- (C) スタッフミーティングは組織で可能なシステム改善に結びつくとの報告があるが、実際の導入例とその効果を報告した例は少なく、結果は必ずしも一定していない。
- (D) スタッフミーティングの導入が組織的な事故防止対策に与える効果について、当看護部の事例を用いて検討した。

ここで大切なのは、(改訂文案C)を書くためには十分な「先行研究の研究(連載第2回を参照)」を行わなくてはならないということです。

ところで、SHELLモデル分析のほうはこの研究においてどのような意味をもっているのでしょうか。この発表者たちは、スタッフミーティングだけでなく、SHELLモデル分析も導入していることが(A)からわかります。そして、スタッフミーティングだけでなく、SHELLモデル分析についても検討したことが(C)からわかります。しかし、(原文D)にはSHELLモデル分析に関する記述がないために、この研究におけるSHELLモデル分析の役割は明らかでなく、研究全体の焦点もぼやけたものとなっています。

細かいことですが、(B)を読むと「スタッフミーティング」が「リスクマネージャー・スタッフミーティング」の略であることがわかります。そうすると、タイトルに使われている「スタッフミーティング」も略語だと解釈するのが妥当でしょう。しかし、それは、この(B)を読んで初めてわかることです。このように、タイトルに略語を使うことは、タイトルの意味を不明瞭なものにしてしまうことがあるため、その研究分野で広く使われ、誤読はありえないと認められている場合を例外として、タイトル中に略語は用いないのが一般的です。

最後は抄録③です。

抄録③「はじめに(序論)」

- (A) 看護学生にとって臨地実習は学内で学んだ理論と実践を結び付ける重要な場である。
- (B) 当院では、実習環境を整えるため指導者や学生からの評価を基に検討を重ね実践してきた。
- (C) 伊藤ら¹⁾は「指導者と学生の人間関係が実習環境には重要である」と述べている。
- (D) 指導者により学生との人間関係に差があるのではないかと考えた。
- (E) 今回学生と指導者の人間関係がどのように築かれているか評価、検討し、指導上の示唆を得たので報告する。

(A)が一般的な概念の確認、(B)は自分たちが行ってきたことの紹介、(C)が先行研究の紹介、(D)が解くべき疑問となっていて、きれいにストーリーが組まれています。

注目すべきは(D)で、「指導者のもつ何らかの特性(性別、指導経験年数、性格など、たくさんのことが想像されます)によって、学生との人間関係に差があるのではないかと考えた」ことがわかります。これで、この研究の目的は定まったといえるでしょう。ところが、(D)を受ける具体的な研究内容の説明が(E)にはなく、漠然とした文章になっています。そのため、どのような研究を行ったのかがよくわからなくなっています。たとえば、次のように書いてあったらどうでしょうか。

- (E) 指導者の特性(特に指導経験の有無や指導経験年数)と、指導者・学生間の人間関係とのあいだの関連について検討した。

ただし、(D)では、単に「指導者により」としか書かれておらず、(E)にもこれに関する記述がないため、実際には、指導者のどのような特性に注目したのかはわかりません。しかし、ここがこの研究でもっとも大切なポイントです。

4. 「研究目的」はカーナビをセットすることである

「研究目的」は、独立した段落を設けずに「はじめに」の最後の文章として書かれることも多いのですが、独立した段落として書かれる場合もあります。3つの抄録の「研究目的」を並べてみましょう。

抄録①～③「研究目的」

- ① スタッフミーティングで事故事例を検討することは、組織的なシステム改善の対策につながることを明らかにする。
- ② 発赤が発生した段階で加圧部皮膚温から褥瘡の治癒経過を予測する指標を得る。
- ③ 学生と指導者の人間関係から見た望ましい実習環境について明らかにする。

①の目的はこれで明らかになりました。「スタッフミーティングで事故事例を検討する→組織的なシステム改善が行われる」という流れを確かめることです。具体的には、「スタッフミーティングで事故事例を検討した場合と、しなかった場合とで、その後の組織的なシステム改善の差を検討したのだろうか」と想像することができます。

②はわかりやすい文章です。ただ、「指標」ということばが少し厄介そうです。「褥瘡の治癒経過を予測するための予測式みたいなものが与えられるのかな?」と想像してしまうかもしれません。もし、単に「加圧部皮膚温と褥瘡の治癒経過との関連を検討した」のであれば、「発赤が発生した段階における加圧部と正常部との皮膚温のちがいと褥瘡の治癒経過との関連を明らかにすること」とするほうがよいでしょう。

①と②に比べますと、③は、さまざまな理解や想像ができそうなことば(人間関係・望ましい・実習環境)で構成されていることがわかります。このような文章は目的が十分に定まっていない研究でしばしば見られます。このような場合には、「『人間関係』はどのように調べたのか」、「どのような場合を『望ましい』と判断したのか」と自問して、できる限り実際にを行った具体的なことばに置き換えることをお勧めします。

ところで、ここで書くべき「研究目的」とは、この文章(発表)の中における「目的」です。抄録であれば、その抄録の中で明らかにされるべきものであり、発表であれば、発表時間内に完結されるべきものです。つまり、遠い将来ではなく、今回行った研究のためのものです。たとえば、スーパーマーケットに寄ってから役場に回り、病院で用を済ませて家に戻るとすれば、全体のドライブが一連の研究であり、スーパーマーケットまでたどり着くことが今回の目的です。したがって、カーナビはスーパーマーケットにセットします。もしも、すでに役場まで来ているのであれば、「はじめに」で、家→スーパーマーケット→役場の説明があるはずで、カーナビは病院にセットされます。

表 学会抄録を書くためのチェックポイント

タイトル(演題)

- (1) 具体的な用語を使っているか。
- (2) 略語は使っていないか。
- (3) 実施した研究内容が想像できるか(少しくらい長くてもよい)。
- (4) 「(A)と(B)との関連」, 「(A)が(B)に与える(及ぼす)効果」, 「…の一例」のように, 単純明快な文章構造か(それぞれ, 観察研究, 介入研究, 症例報告の例。ただし例外あり)。

はじめに(序論)

- (1) 背景(一般論, 経験, 先行研究), 研究目的, 研究内容概略がそろっているか。
- (2) 背景は, 直接関連する事柄に留められているか。
- (3) 一般論と経験は, 最小限に留められているか(省略も可)。
- (4) 先行研究は引用されているか(省略は不可)。
- (5) 研究目的と研究内容概略は, 具体的に書かれているか。
- (6) 研究目的と研究内容概略は, 今回の発表内容に限定されているか。

5. おわりに: 再びタイトルを考える

「方法」を読まなくてはどのような研究が行われたのかを正しく知ることはできません。したがって, まちがっているかもしれませんが, ここまでわかったことに基づいて, もっと魅力的な, そして, 誤読をされないような「タイトル」を考えてみましょう。次のようなものはいかがでしょうか。

- ① スタッフミーティングにおける事故事例の検討は組織的な事故防止対策の改善に有効である
- ② 加圧部皮膚温と褥瘡治療経過との関連…変更なし
- ③ 臨床実習における指導者の特性と学生との人間関係との関連

①では, 「…有効である」と動詞で終わる文章にしてみました。ややなじみにくい表現になるため, 必ずしもお勧めはできませんが, 結果をストレートに伝えることができるという点からは魅力的な文体といえるかもしれません。

また, 注目していただきたいのは, 「(A)は(B)に有効」, 「(A)と(B)との関連」というように, 文章の構造が単純明快だということです。なお, 「(A)は(B)に有効」は, 一般的には「(A)が(B)に与える(及ぼす)効果」となるでしょう。

ところで, 「(A)と(B)との関連」は観察研究に, 「(A)が(B)に与える(及ぼす)効果」は介入研究に用いられます。このように, タイトルだけで基本的な研究デ

ザインを理解してもらえるようにしたいものです。今回の例にはありませんでしたが, 学会発表には症例報告, 事例報告という分野もあります。これは, 意図して何かの研究を行ったのではなく, 「こんな患者さんがいました」といった報告で, 「…の一例」のようなタイトルがつけられることが多いようです。ひとつではなく, 複数の症例をまとめて報告する場合もあります。

抄録は, 研究内容を正確に読者に伝えるのが目的です。そのためには, 注意深く計画され, 注意深く実施された研究でなければならないのは当然ですが, その執筆には相当の文章力と集中力が要求されることも付け加えておきましょう。

さて, これら3つの研究は, どのような方法で行われ, どのような結果が得られたのでしょうか。これについては, 次回を楽しみにしていただくことにしましょう。

謝辞とお詫び:

今回の添削の件で心よりご賛同いただきました岩手医科大学第一外科 池田健一郎先生をはじめ, 抄録をご提供くださいました看護部の皆さまに深く感謝の念を申し上げます。筆者の読解力不足のために, 誤った解釈をし, 的外れの批判をしていることと思います。深くお詫び申し上げますとともに, お許しくださいますよう, お願い申し上げます。